ACRYLART

アクリラート別冊2010

The Scholar 20 Perspective

The Scholar Perspective 20

アクリラート別冊 2010

Holbein

ごあいさつ

時代が変わり世代が変わっても、アーティストや造形芸術家を志す若者の脈が途絶えることはありません。常に新たな表現者たちの、次世代を担う制作がどこかで続けられています。人類の歴史が続く限り、芸術も終わらないのです。
ではなぜ、人は絵を描くのでしょう。ある人は、ものに対する信仰告白だと言い、またある人は、世界の違う見方を提示するのが美術だ、と言います。いや描かずにおれないのが人間の本能なのだ、と主張する人さえいます。正解はひとつではないのかも知れません。しかし実用性がないにもかかわらず、途切れることなく続く美術史を見る限り、絵画、美術というものが人間が生きる上でなくてはならないし、なくならないものであることだけは事実のようです。その奥深さゆえに、歴史上、絵画にはさまざまな解釈が試みられ、同時に幅広い表現のバリエーションも登場しました。多様化をもたらしたものは、社会や体制の変化、人々の宗教観や嗜好の変化であり、そして物質面でそれらを支えてきたのが、科学技術の発達による絵画材料の進歩であったことはいうまでもありません。現代においても、材料を提供させていただく側の私たちの使命は、時代のアーティストの要望に応えられる素材を開発してゆくことだと信じています。また逆に、新しい素材をこちらからも提案することで、かつてなかった新しい表現やマチエールを作家とともに創造できればと願っている次第です。
さて、今年も20名の精鋭アーティストたちスカラシップ奨学生の作品集ができました。ここに記された思想と表現を、どう読み取られますでしょうか。まだ若手に属する彼らこそ、リアルタイムで知ることのできる、美術史の最先端を担う作家たちといえるでしょう。

2010年7月

ホルベイン工業株式会社
スカラシップ実行委員会

The Scholar Perspective 20

Contents

第23回奨学者（五十音順）

麻生知子 ASO Tomoko 12・34

飯沼知寿子 IINUMA Chizuko 13・37

伊藤雅恵 ITOH Masae 14・40

瓜生　剛 URYU Tsuyoshi 15・43

門田光雅 KADOTA Mitsumasa 16・46

加納明日香 KANOH Asuka 17・49

榊　貴美 SAKAKI Kimi 18・52

佐藤和栄 SATOH Kazue 19・55

白石綾子 SHIRAISHI Ayako 20・58

鈴木健二 SUZUKI Kenji 21・61

俵　萌子 TAWARA Moeko 22・64

寺島みどり TERASHIMA Midori 23・67

西川　茂 NISHIKAWA Shigeru 24・70

廣沢美波 HIROSAWA Minami 25・73

福井直子 FUKUI Naoko 26・76

藤井俊治 FUJII Toshiharu 27・79

保坂　毅 HOSAKA Takeshi 28・82

三橋　灯 MITSUHASHI Akari 29・85

山下美幸 YAMASHITA Miyuki 30・88

和出伸一 WADE Shin’ichi 31・91

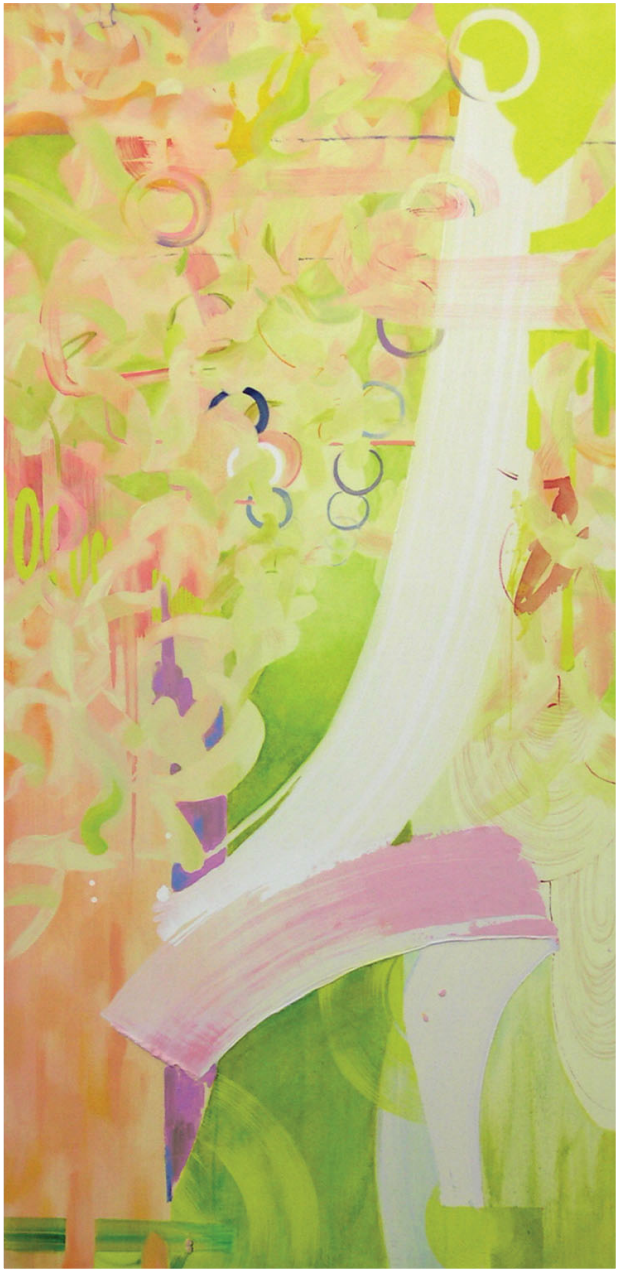
The Scholar Perspective 20

Works

第23回奨学者の作品

麻生知子

家
油彩画 9 点、祖母の水彩画 1 点
全体：261.0 × 299.0 ㎝
2009 年



飯沼知寿子

しなやかに
キャンバス、油彩
258.0 × 125.0 ㎝
2010 年

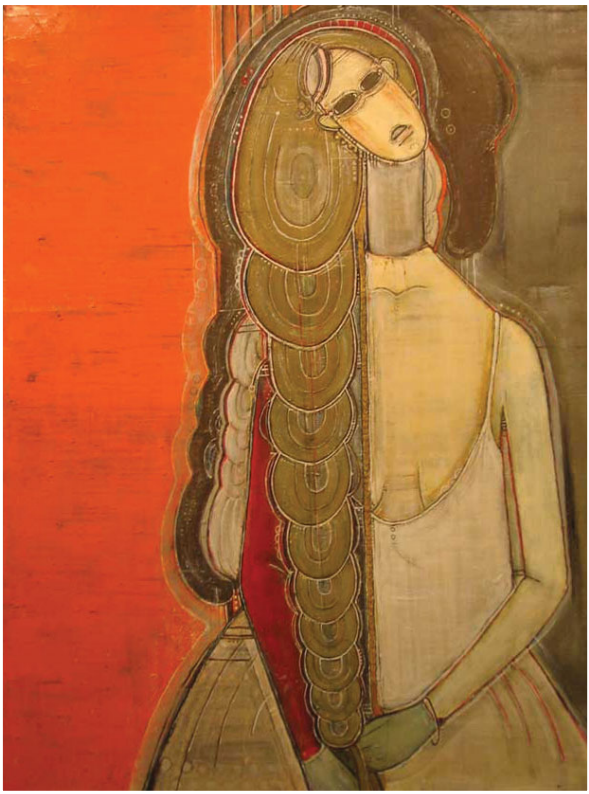
伊藤雅恵

She Has Mountain
キャンバス、油彩
130.0 × 194.0 ㎝
2009 年

瓜生　剛
侵蝕する光景
キャンバス、油彩
145.5 × 145.5 ㎝
2009 年

門田光雅

稲喰（いなはみ）
綿布、アクリル、砂
190.0 × 140.0 ㎝
2009 年



加納明日香

まだ
キャンバス、油彩
130.3 × 97.0 ㎝
2009 年

榊　貴美

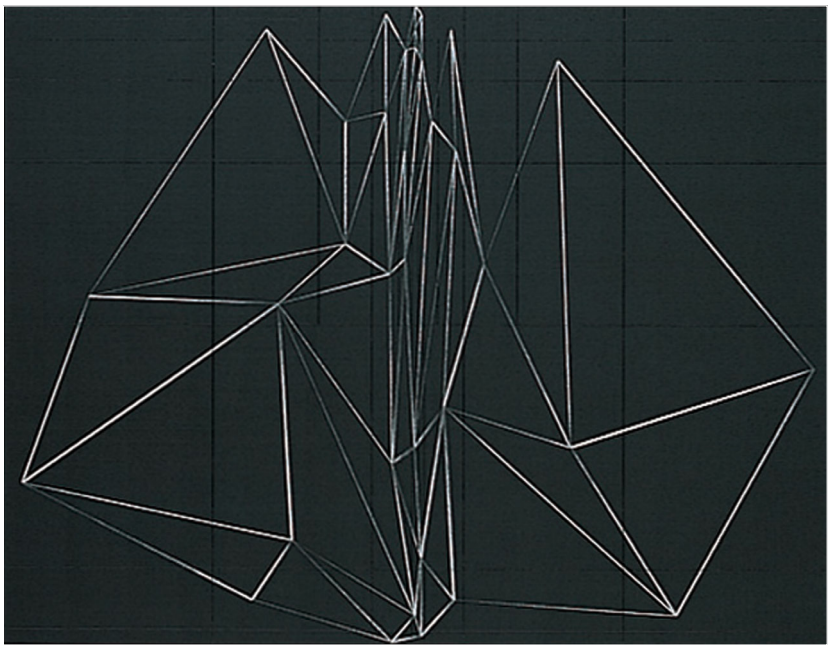
fake dance 1
チョークパネル、油彩
96.0 × 162.0 ㎝
2010 年

佐藤和栄

OPHELIA-04
パネル、綿布、アクリル、和紙、油彩
145.5 × 145.7 ㎝
2010 年

白石綾子

a flower petal
パネル、柄布、油彩
180.0 × 180.0 ㎝
2009 年



鈴木健二

floating mountain (second version)
キャンバス、アクリル、オイルパステル、油彩
112.0 × 146.0 cm
2010年
photo by 柳場　大

俵　萌子

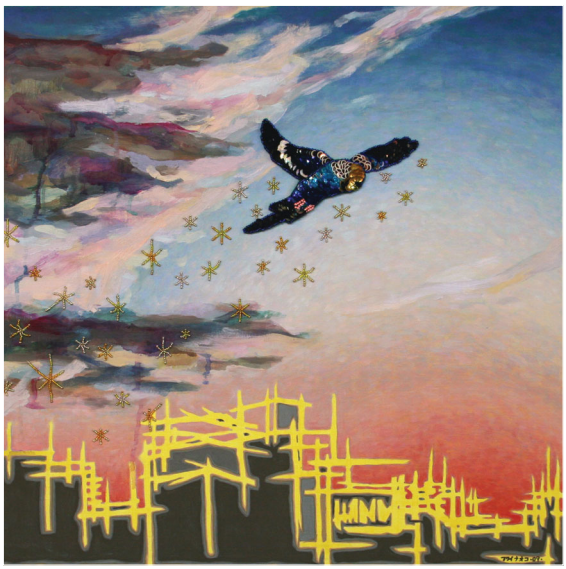
untitled 10-02
キャンバス、油彩、オイルパステル
162.0 × 162.0 ㎝
2010 年
photo by　飯田朋宏

寺島みどり
クリスマスの4日くらい前
キャンバス、油彩
145.5 × 242.3 ㎝
2009年
photo by　表　恒匡

西川　茂

interlude 3
木工パネル、麻布、油彩、蜜蝋
135.0 × 135.0 ㎝
2009 年
photo by　ヨシダ ミナコ

廣沢美波
ウキウキ日光浴
キャンバス、油彩
116.7 × 91.0 cm
2009 年



福井直子

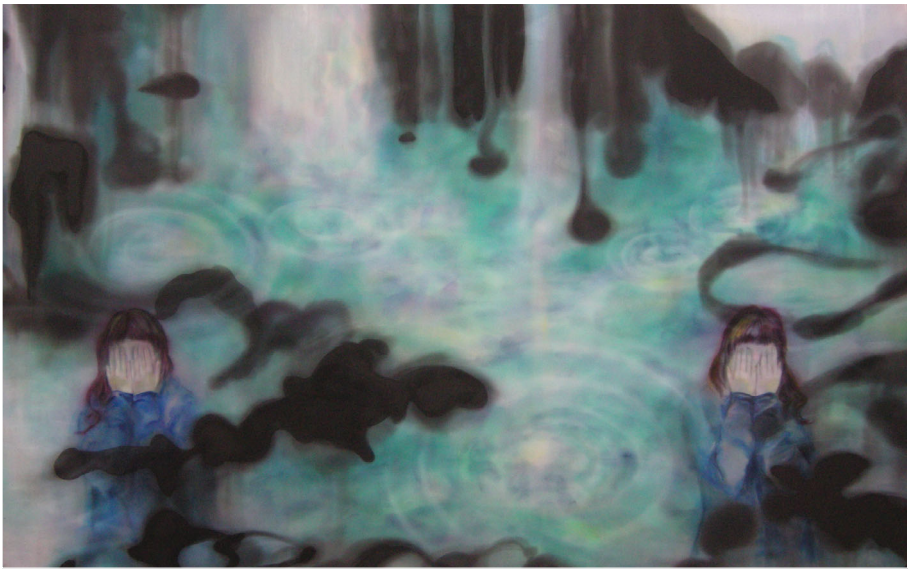
空　高く飛べ
キャンバス、油彩、ビーズ刺繍
53.0 × 53.0 ㎝
2009 年

藤井俊治

美しいものぜんぶ
綿布、油彩
162.0 × 130.3 ㎝
2009 年

保坂　毅

左から：Stripe13-1、Stripe13-2、Stripe13-3、Stripe13-4、Stripe13-5
木材、ＭＤＦボード、膠、油絵具
左から：30.0 × 13.0、30.0 × 14.0、30.0 × 14.5、30.0 × 11.5、30.0 × 13.5 ㎝（各奥行き：最大７㎝）
2009 年



三橋　灯

とこしえの畔り
綿布、アクリル
197.0 × 333.3 ㎝
2010 年

山下美幸

ムー大陸の右
キャンバス、油彩
116.7 × 90.9 ㎝
2010 年

和出伸一

「トーテム中学生」の絵
綿布、アクリル
53.0 × 45.5 cm
2010 年

The Scholar Perspective 20

Report

第23回奨学者のレポート

麻生知子

ASO Tomoko

この一年のこと

私は昨年春に学校を卒業し、それから一緒に暮らしている友人と二人で日本各地を旅して、その場所で見たものをもとに作品を制作して、その場所で展覧会をしていく『ワタリドリ計画』という活動をしています。渡り鳥が暖かい場所と餌を求めて飛んで行くように、私達も展示場所と作品の題材を求めて飛んで行くので「ワタリドリ」と名付けました。それまで東京以外の場所で展示をしたことがなく、また、ずっと埼玉の同じ家に暮らしてきたので、知らない土地に行くことや、事前取材と展示期間の短い間でも他の土地に暮らせることはとても新鮮でたのしいことでした。

『ワタリドリ計画』を始めてすぐに、自分が病気なことがわかりました。自分を守る免疫が、なぜか自分を攻撃してしまう慢性の病気です。いくつか種類があるのですが、後になって混合性結合組織病という難しい名前がわかりました。ただ、あまりにも実感が無く、まだ症状も少なかったので、旅と制作と展覧会をしていきました。それより、早くたくさんの場所に行きたいと思いました。

私の叔母は絵を描く人で、隣の家に住んでいましたが、私が美大浪人をしている時に同じ種類の病気で亡くなりました。最後は身動き取れなくなっていたのを見て、できるうちになんとかしないとできなくなってしまうと、漠然と焦った気持ちになりました。自分も病気になってからは、よくそのことを思い出しました。

一年前の春、まだ雪が残る札幌を皮切りに、美術館のご好意で広い展示室を使わせていただいた長岡、ねぶた祭りにも参加できた青森、温泉を巡った盛岡、初めて美術館の企画で展示させていただいた静岡、友人と共同制作した名古屋、弟が暮らす冬の中国まで取材に行った横浜。

『ワタリドリ計画』を始めてちょうど一年になる新潟の展示へ向けた取材から帰ってきて、いよいよ調子が悪くなって入院しました。これまで病気をしたことが無かったので、ほとんど始めての入院でした。この一年は、いろいろな場所に滞在してきたので、これもまた滞在地の一つと思えばいいと思ってみたものの、まわりは重症な人が多く、私は元気なつもりだけれども、もう

自分はこういう病気の側にいるのかと思うと怖くなり、早くこの病気の人達との合宿生活から抜け出したいという気持ちでいっぱいでした。15階の病室からは一年前に展示をした谷中や上野がよく見えました。

それから今は、家にいます。

絵を描く時、いつも、自分にとって極力うそにならないように描こうと思ってきました。そのためには自分をよくわからないといけません。ところが今は自分のことがよくわかりません。朝起きておっかなびっくり自分の体を動かしてみたりします。これからのことを考えると今はとてもぼんやりしています。すべてを作品に、と思いたいけれど思えません。ただなんとなく、また一年経てば、一年後には何かしら満足いくこともありそうに思っています。思えば、春はいつもぼんやりしていた気もします。

『ワタリドリ計画』はこの後、新潟と熊本へ行きます。渡り鳥が暖かい場所と餌を求めて飛んで行くように、展示場所と題材を求めて飛んで行くのが『ワタリドリ計画』です。行ってみたいところがまだまだたくさんあります。

（2010年3月）

六畳間
キャンバス、油彩
90.0 × 120.0 ㎝
2009 年

犬の家
キャンバス、油彩
53.0 × 45.5 ㎝
2008 年

麻生知子

1982 年　埼玉県生まれ
2009 年　東京造形大学絵画科卒業

個展
2006 年　東京都庁／東京
　　トーキョーワンダーサイト本郷／東京
2007 年　キッコーマン株式会社東京本社／東京
　　Gallery Jin ／東京
　　ギャラリー上原／東京
2008 年　文京アート／東京
2009 年　Gallery Jin ／東京

グループ展他
2006 年　「仁戸部弓彦・麻生知子」二人展　　亀有ギャラリーバルコ／東京
2008 年　団・DANS「The House」　日本ホームズ住宅展示場／東京
　　群馬青年ビエンナーレ　群馬県立近代美術館／群馬
2009 年　VOCA 展 2009　上野の森美術館／東京

麻生知子と武内明子の『ワタリドリ計画』～日本全国二人展の旅～
2009 年　5 月　第一回展　札幌市資料館／北海道
　　7 月　第二回展　新潟県立近代美術館ギャラリー／新潟
　　9 月　第三回展　青森県立美術館ギャラリー／青森
　　10 月　第四回展　ギャラリー lavie ／岩手
　　11 月　第五回展　静岡アートギャラリー／静岡
　　12 月　第六回展　ギャラリー早蕨／愛知
2010 年　2 月　第七回展　ギャラリー ARK ／神奈川
　　4 月　第八回展　新潟絵屋／新潟
　　予定　第九回展　熊本市立現代美術館／熊本

飯沼千寿子

IINUMA Chizuko

見る者と見られる者と

ずっと、女という性が気になっていた。例えば「夜道では気をつけなさい」と警告されたりする、この性は何だろう。見る者と見られる者との間の力関係は一体何なのだろう。男性中心の視線はどこから生じるのだろうか。

制作の傍ら、私はフェミニズムに多くを学んだ。『ジェンダー』『家父長制』という、二つの概念はその中でも重要といえる。長い間、公的に男性は主体であり、女性は客体、あるいは他者であり続けた。美術においてもまた、女性は描かれる(見られる)客体だった。だから、フェミニズム・アートの重要性のひとつは、女性たちが自身の主体性を取り戻したことにある。その葛藤が徐々に冷静な眼差しで振り返られるようになった今日、私自身がどのように制作するべきかを考えさせられる。

近代以降、建築、絵画、都市、そして人々の心理にさえ、透視図法は浸透している。ある一点により支配され、その一点に全てが従属するこの構造は、様々な制度や空間の基礎になっている。各個人の心理は、その構造から少なからず影響を受ける。だとすれば、男性中心の視線もまた、各個人が放つものというよりは、社会の構造にひそむ価値観の表れなのだろう。

それまで私は、主体と客体の関係を、両者をモチーフに描いていた。その画面はモチーフの輪郭線と、輪郭線を超えてその内外を行き交う点や面で充満する。そのような方法にこだわって、見られる者の存在を描こうとしたのだ。

しかしあるとき、その関係をもっと空間的なものとして捉えてみたらどうか、と考えた。私は一旦、見られる者をモチーフとすることから離れることにした。見られる者はもちろん、見る者をも巻き込む構造を描こうと思い立ったのである。

現在私は、空間をモチーフに制作をしている。例えば教室のように、黒板を正面に据え、そこに向かって机が整然と並ぶ空間。それでいて、そこにいる人々の意識や視線が、ばらばらに飛び交っているような動的な空間を。輪郭線と点や面にこだわっていた頃には想像もできなかった、描くことの自由を私は今感じている。

交錯する場面
キャンバス、油彩
130.3 × 162.0 cm
2009 年

移り気
キャンバス、顔料、油彩
146.0 × 230.0 ㎝
2010 年

飯沼知寿子

1984 年　神奈川県生まれ
2008 年　東京造形大学造形学部美術学科絵画専攻領域卒業
2010 年　東京造形大学大学院造形学部造形専攻美術研究領域修了

個展
2010 年　トキ・アートスペース／東京

伊藤雅恵

ITOH Masae

２００９年の制作

私は人と話すときに相手の話し方につられることがあります。口調だけでなく思考もつられることもあるように思います。自分から出るはずの言葉だけど、それが二人の人間の間から発生したような感覚が強く湧いたことがありました。他者があっての言葉、そして自我。そこで感じた唯一性の強さにぐっと来た経験が、最近の制作のスタイルに大きく関わっています。

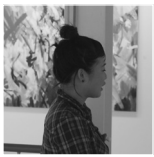
今まで、自身が体験したことのある特別な気持ちをモチーフに、花の図像と物質である絵の具との間を行き来する画面を目指して作品にしてきました。花の図像は気持ちと響かせるパートナーとして選びました。

そこで発生した問題と向き合っていく中で、２００９年から人物をモチーフにして制作することを始めました。主に同年代の女性をモデルに決めて、日常的なやりとりの中で生まれるものを画面にしていく方法をとりました。モデルとの関係において、知り尽くさない、想像を多く残す距離を心がけました。彼女らを更新していく日々の出来事とそれらに対する反応を認識することで受ける直接の印象と、私の頭の中で育った印象が材料になり、ピンとくるものを選びとって作品の中心に据えて形にしていきました。印象を受けて、育てて、選びとるプロセスの中で、彼女らが対峙する私の存在がでてきて、唯一である二人の関係が有するものの形が絵画になりました。新鮮なモチベーションを運ぶモチーフの持つ唯一性と、力強く背中を押すはっきりとした具体性が得られたことが大きな収穫だったと思います。

以前の制作から引き続き大切にしているのは、油絵の具の質感、筆のストロークです。すべてがはまり、必要な結果になることで、それらによって絵の喜びと人の気持ちの交差の達成ができると考えています。

close ／ open
キャンバス、油彩
182.0 × 227.0 ㎝
2009 年

rolling girl
キャンバス、油彩
80.0 × 100.0 ㎝
2009 年



伊藤雅恵

1982 年　愛知県生まれ
2005 年　武蔵野美術大学造形学部油絵学科卒業

個展
2006 年　ラインのむこうのギャラクシー　藍画廊／東京
2007 年　ドラマティックス　Bunkamura GALLERY ＋ Arts&Crafts ／東京
　　モンスター・イン・ミー　藍画廊／東京
2008 年　ふさわしいけしき　トーキョーワンダーウォール都庁／東京
　　NODA CONTEMPORARY ／愛知
　　MIXING IN　トーキョーワンダーサイト本郷／東京
2009 年　She Has Mountain　鎌倉画廊／神奈川

グループ展他
2006 年　SAA 展　武蔵野美術大学美術資料図書館／東京
　　Secret Play　イリーガリンガレージ／東京
　　武蔵野美術大学課外センター展示室／東京
2007 年　トーキョーワンダーウォール入選作品展　東京都現代美術館／東京
2008 年　VOCA 展 2008　上野の森美術館／東京
　　絵画の春　鎌倉画廊／神奈川
　　These Artists Are Good!　NODA CONTEMPORARY BEIJING ／北京

瓜生　剛

URYU Tsuyoshi

「侵蝕する光景」と「内在する景色」

あらゆる情報が日常的に目に飛び込んでくる。しかし私は、目の前に広がる現実の光景に瞳を奪われる。
絶えず辺りを確認する。辺りはすべて命に覆われている。
子供の駆け回る足音が途絶えた公園、主の居なくなった家。そこは緑に覆われていた。知らず知らずに成長している緑の群れと、伸びた蔓は内と外を繋げ境界線を曖昧にし、ひとつの大きな塊となる。
どこか淋しげで呟いているような侵蝕されたそこには、人々の暮らしがあったという微かな痕跡と気配が、遡ったとき時間を連想させる。

徐々に植物に侵蝕されていく事象は時間の蓄積があるからこそ生まれる。
目に見える変化として植物による増殖と侵蝕に着目する。
絶えず移りゆく「時の流れ」は、僕らを無慈悲にからめ取って、今いる場所からやがては締め出す。
何もかもが「時の流れ」には逆らうことができず、あらゆるものは善かれ悪しかれ変化していく。
当たり前のような事象が、実際は存在自体が幻のように儚く消え、命が限られている。身近にある現実は永遠でないことを肌で感じる。

私はニューヨークで生まれ、幼少期を過ごす。
記憶を辿るとそこには楽しげに笑う幼い私と兄弟、両親の姿が浮かぶ。しかし、その記憶が断片ばかりであることや静止していることにいつからか気付く。
押し入れの奥から取り出したアルバムをめくった時、自分の記憶の中のイメージがこのアルバムの中の写真以上でないことを改めて知る。
記憶の断片は両親の写真により、刷り込まれていたものであった。
私の脳裏には動いて、走り回って、遊んだ記憶は跡形も無く消えていて思い出すことはできない。
記憶の断片が作る内在する景色に興味を覚える。
私の中の内在する景色は確かに体験し、蓄

積したことには間違いない。しかし、その記憶はとても曖昧で、本当の記憶が蘇ることは望めない。記憶の曖昧さ、美化されている思い出。その危うさは、永遠にそのままだろう。

誰しもが持つ内在する景色は曖昧で危ういものである。

あらゆる図像が目に飛び込む時代だからこそ、観る者へ共感するイメージ、記号を潜ませて、内在する景色を刺激する。

直接的な表現でなく、あくまでも間接的な表現とする。

時は絶えず繰り返され、積み重なり層を成す。私の記憶の蓄積と観る者の記憶の蓄積とが重なり、そこにまた新たな出会いが生まれる。

時間軸は、事象ごとに異なって存在している。当たり前で誰も目もくれないそれぞれの時間軸を絵の中で意識する。そして、支持体の中で交わり合う。

自分自身の位置軸がどこにあるのか、私は絵画の中で再度見つめ直す。

アンテナ〜蠢くような〜
キャンバス、油彩
116.7 × 116.7 ㎝
2009 年

隙間から見えた景色
キャンバス、油彩
145.5 × 112.0 ㎝
2009 年

瓜生　剛

1981 年　ニューヨーク州（U.S.A.）生まれ
2006 年　東京藝術大学美術学部絵画科油画専攻卒業
2008 年　東京藝術大学大学院美術研究科修士課程絵画専攻油画研究分野修了

グループ展
2003 年　4 人展「残念休息」　KEY Gallery ／東京
2005 年　BOY! BOY! BOY! 展　お茶の水女子大学徽音祭／東京
2008 年　シェル美術賞展 2008　代官山ヒルサイドフォーラム／東京（'09）、京都市美術館別館／京都（'09）
ふなばし現代アート展 '08 アラカルト　船橋市民ギャラリー／千葉（'09）
藝大・茨城大・筑波大卒業修了選抜展 2008　東海ステーションギャラリー／茨城
2009 年　日本芸術センター第 3 回絵画公募展　東京芸術センター／東京、神戸芸術センター／兵庫（'10）
2010 年　ワンダーシード 2010　トーキョーワンダーサイト渋谷／東京

門田光雅

KADOTA Mitsumasa

泥喰（どろはみ）の絵画

水を含んだ画布の上では、色彩や筆触はその具体性は奪われ曖昧な滲みとなるように、手応えの無い脱力感、イメージが希薄となる喪失の感覚と向き合わねばならない。そのような潜在する不自由や条件的な制限に抑圧される瞬間は、己の本質に向き合い計り知るときなのではないだろうか。ステイニングを用いて描く理由の一つは、その技法に伴う物理的な制約によって直面する葛藤や摩擦が露呈する為である。横倒しに寝かせ描く事が定石となるとき、俯瞰的な姿勢から間接的な方法論では垣間見る事の無い全身を用いた直接的な身体性や工夫を獲得しなければならないし、あるいは乾燥の時間内での色彩の鮮度を保ち描く為には反射神経や判断力が必要となってくる。

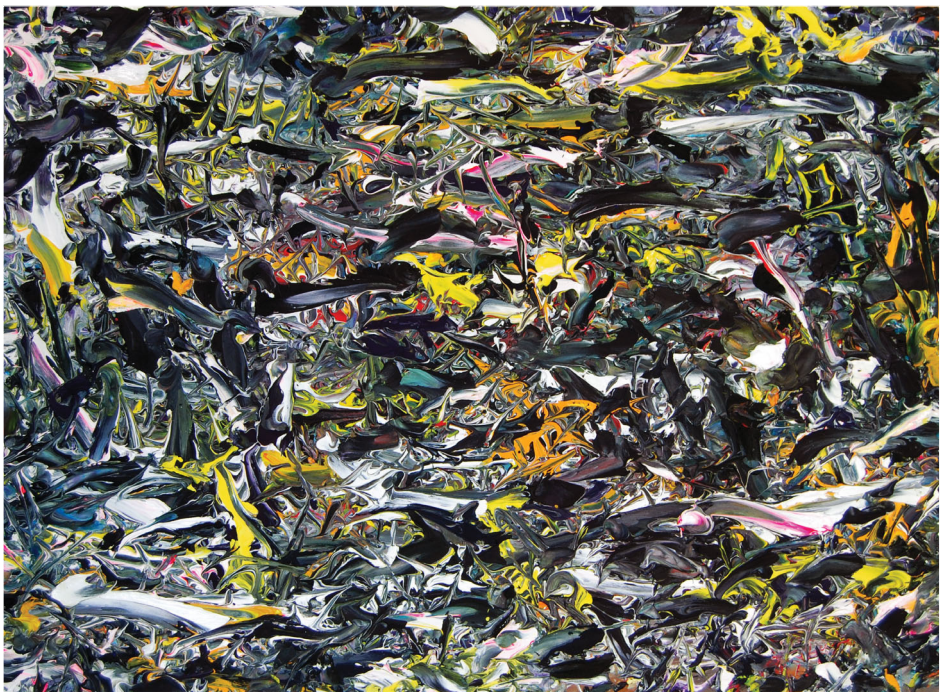
このような制約の限界を積極的に享受する場合、画面は曖昧なまま散漫し茫漠としたもので良いのであるが、逆接的な反動としての触発を連鎖する場合、それは次第に重厚かつ濃密な画面へと変貌していく。それぞれの選択においてそれぞれに提示できる解答が得られるが、前者においては到達する結論が消滅的な傾向や停滞そのものにあるとき、私は画家として敢えて引き受けるべき仕事は、その抵抗や反発の中で込み上げるものを画面へと定着させたいと思う。

重要な事は継承の方法ではないだろうか。ある明確な地と図の表裏の関係性が、その断続的な距離によって成立を謀るように、前伝統が築き上げた状況の排除に基づく批判によって、自身の空虚さへの自覚な強調や依存を投影するだけでは、無関心を装う今日の消費社会の中で養殖される主体性の無さを主体とする逃避的な感覚の一端を担うのみであるように思われる。現代に対し不合理や矛盾、不安や焦燥といった感覚を持つ生身の一人間として、葛藤や苦悩といった体感に基づく線引きの出来ない痛覚を受け入れる上で、その克服の中での継承を求めたいのである。

余談であるが、芥川龍之介の小説・蜘蛛の糸の逸話にあるように、蓮池の水辺に佇む時、その水面に映るものは罪人の蠢く地獄の血の池に通じていた。月も星もない地獄

の空の中途に垂れた蜘蛛の糸は刹那の判断によって己の心を図り知るものであった。色彩や筆触の喪失の感覚の中で変化変容する私の絵画の水面に佇む時、あらゆるものが混濁する今日に暗示されるものは、一見美しく見える水面の底にある倒壊する現実と崩落した神話といった手を掴む拠り所もない混沌の底無しの泥沼が広がっているように思われる。

そのときに、沼底の深くに沈み込み思考を停止してしまう潔さよりもむしろ、咽びもがく無様さの中で泥の味を忘れないでいたい。



此岸（しがん）
綿布、アクリル、砂
140.0 × 190.0 cm
2009 年

Australopithecus・炎上する樹形
綿布、アクリル、砂
130.3 × 162.0 ㎝
2009 年

門田光雅

1980 年　静岡県生まれ
2002 年　東京造形大学造形学部美術学科絵画専攻卒業
2003 年　東京造形大学造形学部美術学科絵画専攻研究生修了

個展
2003 年　フタバ画廊／東京（'04）
2005 年　TRICKSTER　セゾン現代美術館東京事務所　SMMA FACTORY ／東京
2006 年　ギャラリーかれん／神奈川
2007 年　極彩色の獣告展　youkobo ART SPACE ／東京
2008 年　HETEROKARYON　youkobo ART SPACE ／東京
さよならさんかく　工房親／東京
2009 年　俯瞰する樹形図　youkobo ART SPACE ／東京
色彩の火花　LOOP HOLE ／東京

グループ展
2002 年　Abflug 2002　ギャラリー毛利／東京
白熊（はぐま）展　ヒグレ 17 － 15cas ／東京
2003 年　element　exhibit LIVE［laiv］／東京
絵をかく人々のチャリティ展　ギャラリーかれん／神奈川（'04、'05、'06、'08、'09）
2004 年　猿楽祭〜代官山アートフェア 2004　ヒルサイドテラス／東京
2005 年　STUDIO ZOU FIRST EXHIBITION　youkobo ART SPACE ／東京
Picnic vol.001　youkobo ART SPACE ／東京
2007 年　第 26 回損保ジャパン美術財団選抜奨励展　損保ジャパン東郷青児美術館／東京
ART TODAY 2007　セゾン現代美術館／長野
2008 年　テキーラ展　ギャラリー・ニモード／東京（'09）
マーケット・トレース　ART TRACE GALLERY ／東京
2009 年　Nroom artspace first exhibition -niche- 家に返ろう　Nroom artspace ／東京
Rain Meets the Sun　M.K. チュルリョーニス国立美術館／カウナス［リトアニア］
ASYAAF2009（Asian Students and Young Artists Art Festival）　旧国軍機務司令部／ソウル［韓国］
TOKYO CONTEMPORARY ART FAIR　東京美術倶楽部アートフォーラム／東京
Verge Art Fair Miami 2009　CATALINA hotel& Beach Club ／マイアミ［アメリカ］
2010 年　Chocolats-Del Toro 府中　LOOP HOLE ／東京
シブヤペインティングス　ギャラリーニモード／東京

http://www.ki-mon.com

加納明日香

KANOH Asuka

わすれたいわすれたくない

忘れるということがただただ怖くて、今のわたしの時間をなるたけとどめておきたい、と絵を描いていた。忘れたらすべてなくなってしまう。たしかにあったものも、最初からなかったみたく消えてしまう。それが自然なことだとしても、もう少し若い頃の自分にはまったく受け入れられない、というか受け入れたくないことでした。
あれもこれもぜんぶ忘れたくない。いやなこともいいことも。

今だって、わたしはあの頃と変わらず、わたしだけの為に絵を描いている。
今の時間をきりとって、記憶の記録をつづけてる。
ただ、あの頃よりすこし歳を重ねて今思うことは、忘れることもいいんじゃないか？ということ。
こんなことを当時のわたしが聞いたら、おもいきり泣くだろうけど、あの頃より確かにわたしは鈍感になってきていると思う。
穏やかになった、まるくなったといえば聞こえはいいけれど、絵を描く人間として、それはどうなんだろう。と思う。

まいにち生きていく中で、かんじること、においい、色、けしき、温度、空の高さ、かぜのむき、忘れていくことを許してしまったら、わたしが絵を描く理由はなくなるんじゃないか？
理由がなくちゃ、絵が描けないわけではないけれど、わたしの視界はぼやけつつある？
そういえばこの絵だってなんで描きはじめたのだっけ…
この頃、そんなことを思うときがある。つづけたい、つづけたいのに。

それでも、今はまだ「生きているうちは」と思う。
死んでしまった先のことはどうしてもわからないけど、せめて生きているうちは。

わたしがわたしである時間は、ジツは本当に短いものであると思う。
ぐうぜんにも出会ったわたしが、忘れたくないって言っているなら、やっぱりわたしはわたしの為に。時間の記録を。記憶の記

録を、たんたんと死ぬまで。いちばん気持ちのいい方法で。ひそやかでいい、呟くように、つづけたい。

ただ、その中で、こぼれてく時間があっていい。
忘れるものがあっても、なんかだいじょうぶじゃない？って。
思いだす日がきっとくるかもしれないし、こないで死んじゃうかもしれないし。

めにうつる範囲のわたしのちいさな時間はあつめて並べておきたいです。
それがどんなに気持ち悪くても、みにくくても。

（２００９／10／13よる）

そのさき（4点1組）
キャンバス、油彩
各41.0×27.3㎝
2009年

みちかけ
キャンバス、油彩
91.0 × 72.7 ㎝
2009 年

加納明日香

1984 年　千葉県生まれ
2006 年　御茶の水美術専門学校卒業
2008 年　武蔵野美術大学造形学部油絵学科卒業

個展
2010 年　シロタ画廊／東京

グループ展他
2005 年　GEISAI#8　　東京ビックサイト／東京（'06）
2008 年　アートアワードトーキョー　　行幸地下ギャラリー／東京
カウパレード東京 2008　　東京丸の内界隈／東京

http://www.geocities.jp/sukamo_imaiku/

榊　貴美

SAKAKI Kimi

作品

例えば、戦争にしても自然破壊や暴力や差別にしても、何にしても、仕方がないでは片付けられないけれど、仕方なく過ぎていくことは人間であるうえで当たり前にあります。そのような中で、相反する2つの基準（あるいは複数の基準）が混在し、成り立ってしまう事実や矛盾を通し、人間社会における個人と集団・人間の欲望・様々な孤独感・不安感・残酷さなど色々なキーワードをもとにシニカルに構成しています。

子どもを取り扱った作品は、私の作品の中でも、より物語性の強く表れた作品であり、子ども達の遊びの世界を取り入れて表現しています。

そこには、遊びという自発的に受け入れられた1つの決まったルールに従って起こる非日常的な世界と、『子ども』という希望が、崩れた姿で存在しています。様々な情報や教育からつくり上げられた秩序性に対し、子ども達の中に存在する反秩序性が世の中の秩序への問い返しなのです。絵の中の子ども達が起こす行動には人間・現代社会が抱える問題などが提示されており、現実とバーチャルの世界が混在し、現実と非現実の境界線が曖昧な現在に生きる子ども達の姿があります。

具体的に自身の作品において重要視していることの1つに、童話やおとぎ話の物語にある世界観などがあげられます。おとぎ話は、私たちの深いところにある望みや、強い欲求が具体的な形をとったもので、誰が読んでも理解でき、どことなくやわらかく砕かれて描かれています。願いや空想という楽しみと、教訓めいたもの、または恐怖や憎悪が同時に1つの物語の中にあり、よりお互いを際立たせているように思います。そして空想の世界（遊びでいう非日常の世界）はどこかで現実世界とリンクしているのだと思うのです。

そして、ペイント作品において原初的なものが含まれる絵の感覚と、描く前提に言葉が存在するという現在の感覚、その両方の『描くこと』と『語ること』が私の中で重要で、また、具象的に捉えることはイメージを具体的に伝えられるという利点があり、この場合私は、固有性のない記号のようにそれを存分に使いたいと考えています。

上：fake dance 2
下：fake dance 3
チョークパネル、油彩
各 96.0 × 162.0 ㎝
2010 年

榊　貴美

1983年　和歌山県生まれ
2010年　東京造形大学造形学部美術学科絵画専攻領域卒業
　　東京造形大学大学院造形研究科美術研究領域在学中

個展
2008年　Gallery Tera Tokyo ／東京
　　kips Gallery ／ニューヨーク〔U.S.A.〕
　　ギャラリー b.TOKYO ／東京
2010年　Gallery Tera Tokyo ／東京

グループ展他
2002年　SORRATOPIA　JBP. オーバルビル／東京
2005年　ど美缶・選抜展　GALLERIAPUNTO ／東京
2006年　2×I　東京造形大学 P-3 ／東京
2007年　転移する肉体と記憶　Gallery MOKE ／和歌山
　　asian contemporary art fair PIER 92 ／ニューヨーク〔U.S.A.〕('08)
　　トーキョーワンダーウォール公募 2008 入選作品展　東京都現代美術館／東京（'08）
2008年　SCOPE art fair scope Miami ／マイアミ〔U.S.A.〕
　　SCOPE art fair scope London　Lord's cricket Ground ／ロンドン〔イギリス〕
　　Syanghai art fair ／上海〔中国〕
　　ART TAIPEI ／台北〔台湾〕
　　bridge art fair N.Y ／ニューヨーク〔U.S.A〕
2009年　Shcontemporary Art Fair　上海国際展示場／上海〔中国〕
　　ART OSAKA　2009　堂島ホテル／大阪
　　ARTO ART FAIR BUSAN　釜山海雲台セントムホテル／釜山〔韓国〕
　　Korea international art fair　COEX ／ソウル〔韓国〕
　　SCOPE art fair scope Basel ／バーゼル〔スイス〕
　　Help Me-Kimi Sakaki, On the spoon-Yoko Kitagawa 展　Times Art Gallery ／台湾
　　Art-icle 賞 2009 入選作品展　東京画廊 +BTAP ／北京〔中国〕、Keumsan Gallery ／ソウル〔韓国〕、
　　Design Festa Gallery ／東京
2010年　ZOKEI 展　東京造形大学／東京
　　東京五美術大学連合卒業・修了制作展　国立新美術館／東京
　　ART FAIR TOKYO 2010　東京国際フォーラム／東京
　　アートアワードトーキョー丸の内 2010　行幸地下ギャラリー／東京
　　(財)佐藤国際文化育英財団－第 19 回奨学生美術展　佐藤美術館／東京（信濃町）にて 10 月 23 日～ 12 月 17 日迄開催予定

佐藤和栄

SATOH Kazue

遍在する自己を繋ぐ回路

どうにも逃れられないと感じるすべての心地悪さは、この身体に由来するものではないだろうか。

骨折したあばら骨をそっと皮膚の上から確かめる。しかし自分の身体でありながら内側がどのような状態なのか開いてみなければよく解らない。このようなことにならなければ普段は自分の内側には意識が及ばずに、いつも意識は皮膚の外側の世界だけに向けられている。

私は病院に行くことがそれほど嫌いではない。あの真っ白い壁に囲まれた空間でただ静かに順番を待っている時など、自分が身体から離れて存在することをあらためて気づかせてくれるからだ。

またそこは、日々の生命活動とは対極にある病や死というものが親密にあり、日常とは切り離された空間として、時にいろいろなイメージを私に与えてくれる。たとえば、身体を持たざるを得ない私は、なすすべも無くどこか心地悪さを我慢しながら漫然と婦人科特有の屈辱的な椅子に座っていると、この身体を拘束する椅子の機能と内部に身体を包み込む空間を持った建築の相似性に気づかされたりする。さらにそのイメージは、薄い皮膚で内部と外部を分け、自己を規定する私自身の身体とも繋がっていく。

絵画は永遠に奥に続いて行くように見えるが、自分を含めた世界を映しこんでいる鏡のように底がある。絵画を見るということは自分を見返す行為でもある。絵画空間を自身の身体を意識せざるを得ない状況を作り出す建築的なモチーフで規定し、外在化する自分が内側を見返すことで同時に内在化できるのではないだろうか。

空間を規定するフレームは内側にも外側にも属さないそれ自体が次元を持つ中間領域として表現していたが、次第に空間を重層的に作り上げることで絵画表面自体がその役割を果たし、フレームはその折り重なる多様な層の間を呼吸するように明滅を繰り返す縫合するラインに変化してきた。私自身の身体が年々崩壊して行く感覚とともに、震える生命的なものを作り出すための不確定な要素が重要になってくることは必

然的なことだろう。
私はこのような自然のシステムに似た崩壊と生成という行為を繰り返すことで、絵画の中に永遠のイメージを定着させていきたい。

OPHELIA-02
パネル、綿布、アクリル、和紙、油彩
162.2 × 162.2 ㎝
2010 年

OPHELIA-03
パネル、綿布、アクリル、和紙、油彩
143.0 × 143.0 ㎝
2010 年

佐藤和栄

1968 年　東京都生まれ
1991 年　女子美術大学芸術学部絵画科卒業
1993 年　武蔵野美術大学大学院造形研究科修了

個展
1999 年　G アートギャラリー／東京
2000 年　G アートギャラリー／東京
2002 年　exhibit LIVE&MORIS ／東京
2004 年　ギャラリー山口／東京
2005 年　exhibit LIVE&MORIS ／東京
2008 年　galerie SOL ／東京
2009 年　galerie SOL ／東京
2010 年　浜松市秋野不矩美術館市民ギャラリー／静岡（浜松市）にて 11 月 30 日～ 12 月 19 日迄開催予定

グループ展
1994 年　第 23 回現代日本美術展　東京都美術館／東京、京都市美術館／京都
2001 年　21 世紀連立美術展　東京都美術館／東京
2002 年　時代を担う作家たち　東京アートファクトリー／東京
燃えるアジア　中和ギャラリー／東京
利根山光人記念大賞展ビエンナーレきたかみ　北上市生涯学習センター、北上市市民交流プラザ／岩手
2003 年　百年の賞楽　exhibit LIVE & MORIS ／東京（'05）
2004 年　シェル美術賞展 2003 ＞ 2004　代官山ヒルサイドフォーラム／東京、京都市美術館別館／京都
Contemporary Art Festival, Nebula　埼玉県立近代美術館／埼玉（'06）
2005 年　銀座あおぞら DE アート　泰明小学校校庭／東京
2006 年　上野の森美術館大賞展　上野の森美術館／東京、彫刻の森美術館／神奈川、福岡県立美術館／福岡、
京都府京都文化博物館／京都（'07）
美浜美術展　福井県立美術館、美浜町総合体育館／福井、大阪府立現代美術センター／大阪（'07、'08）
2008 年　シェル美術賞 2007 京都展＜ 2003、2004 年入賞者コーナー＞　京都市美術館別館／京都
第 25 回上野の森美術館大賞展入賞者展　上野の森美術館ギャラリー／東京
ART SALAD　masuii RDR ／埼玉、KWANHOON gallery ／ソウル〔韓国〕
2009 年　創造都市はままつ絵画公募展　浜松市秋野不矩美術館、浜松市美術館／静岡

白石綾子

SHIRAISHI Ayako

制作について

子どもたちは物心つかないうちから、男の子は車や電車が好きだったり、女の子はぬいぐるみや、おままごとが好きだったり、誰も何も、教えても、強制もしていないのに違いがあったりする。性という差はどういうものなのか。好きなものが何かというのが違うだけではなく、見方、考え方、感じ方さえも、何か違いがあるのだと思う。私自身、女なので同性の立場から、他の女性たちがどんなことを日々考え、感じて、生活しているのか、男性よりは女性の気持ちが分かると思う。男性には見せない、気取らず、飾らず、かっこつけない、日常の場面。大人になると自分以外の人には、その側面しか見せない。だから、他人の方が良く見えたり、うらやましく思ったりすることがある。そして、男性から見た女性というのは、さらにフィルターがかかって美化される。

日常の中で、無意識に生活していても、女は女なんだと感じることが、不思議で面白い。

分かろうとしても、よく分からない。考えても、感じても、疑問が出てくる。そんな疑問を、作品にぶつけてみる。

a flower petal
パネル、柄布、油彩
180.0 × 180.0 ㎝
2009 年

彩り
キャンバス、油彩
145.0 × 145.0 ㎝
2009 年

白石綾子

1982 年　群馬県生まれ
2007 年　武蔵野美術大学造形学部油絵学科卒業
2008 年　武蔵野美術大学大学院造形研究科美術専攻油絵コース修了

個展
2009 年　GALLERY b.TOKYO ／東京

グループ展
2006 年　Galerie Juillet ／東京
2007 年　シンジュクアートインフィニティー　旧マルイシティ新宿工事仮囲い壁面／東京
シェル美術賞展 2007　代官山ヒルサイドフォーラム／東京
トーキョーワンダーウォール作品展　東京都現代美術館／東京
ミニギャラリー千代田／群馬
2008 年　秘すればこそアート　ギャラリー Q ／東京
銀研＊アートフェア　銀座芸術研究所／東京
dopodomani　井上画廊／東京（'09）

鈴木健二

SUZUKI Kenji

絵が在ることについて

いつも気になることがあります。絵を見ていて気になることは、それが変化していくように見えることです。この変化を見ているとき、絵が目の前に在るということを感じます。

この変化は、例えばある色彩が明るくも暗くも、赤くも青くも見えるといった視覚的な対比の効果や、ある形象が鳥にも魚にも見えるという変容ではありません。

具体的なものであっても、あるいは、線や色や形といった造形的な形象でもよいのですが、これら「絵の中のもの」が、この「絵の中のもの」によって現れた空間を含めて、二次元的に構成され、つくられた絵の全体、つまり「画面」として見える変化です。

その瞬間的な出来事は、言い換えると絵に描かれた対象が、描かれてあることに見えること。置かれた形が、全体として構成に見えること。などです。

「絵の中のもの」と「画面」は最初には同時に把握され、目の前に絵が在る。と認識されるのかも知れませんが、次の瞬間、「あの絵は赤い」「はっきりとした形をしている」などと解釈するときには色、形、物質、構成などと分かれてしまいます。これは絵の具で描かれたものだけでなく、風景や机上の物の配置に画面を重ね見て、「まるで絵のようだ」と思うときにも、当てはまると思えます。

このことは、何を境にどうして絵に見えるのか、もしくは見えないのか、ということに関わっています。それは絵というものが既にあって、何をどのように描くのか、という事柄以前の問題です。そもそも何をもって絵が在ると強く感じるのか、それでは、絵とは何を指すのか。これはある問いに似ています。それは存在への問いです。

いつもこの世界が在るということを不思議に思います。私たちはこの諸々のものが存在している世界の中にいるということを感じるのですが、この起源もわからない「存在」というものが、理解し難いように思えるのは、世界が「在る」という前提が、世界を語るための条件だからです。

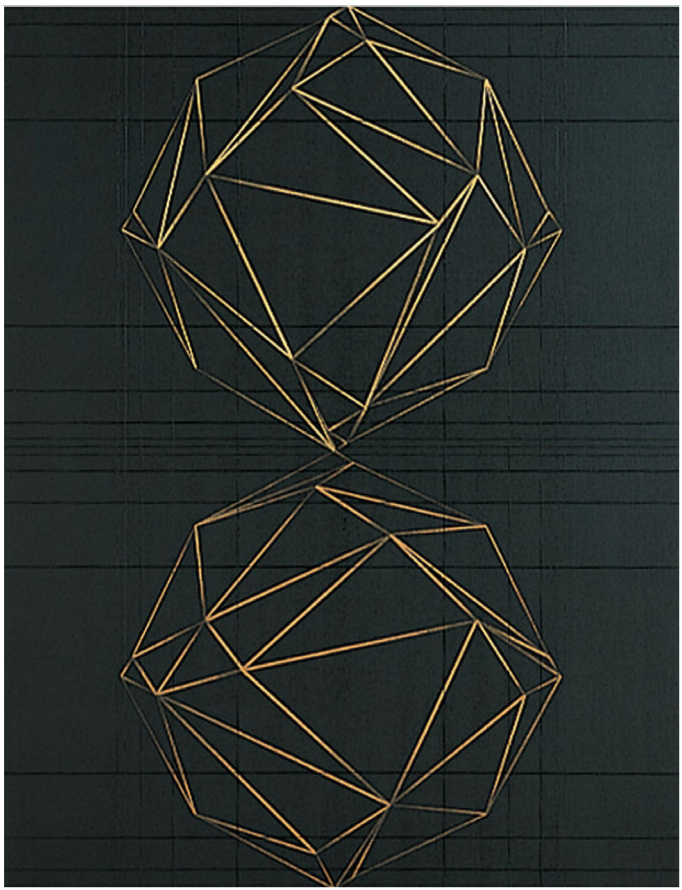
できるものなら、この根源的ゆえに語り難い「在る」という実感を、何かの現れを

通して、絵が現れてくる実感として、作品によって顕したいと思っています。

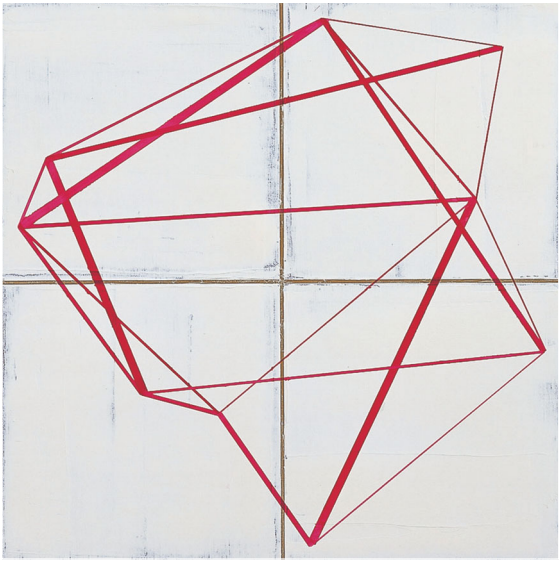
制作の上で、それを実現する一つの可能性としては「絵の中のもの」から「画面」へ、あるいは後者から前者への双方向への変化、持続する変換、認識の揺れ動きをつくれるかにあると思います。

絵を見ているときに、「絵の中のもの」から「画面」に意識が移ったときに、前者を見ていたときに見えていたものとは別の、新たな、絵を見るという、人の構想力に働きかける何か（別の動きの連関が見えてくるような、見ることに於いて、二次元と、三次元と、観念の形式を換える必要のある何か）が見え、逆に「画面」から「絵の中のもの」へ、でも、同じように変化し、それが繰り返し起こり続けるならば、その絵は人が「絵」として何かを見るときの絵の在り方を現しているように思えます。

こうしたことを含め、考え、感じ、つくり続けることが、私の制作の主題であり、動機であり、方法です。



snowman
キャンバス、アクリル、オイルパステル、油彩
146.0 × 112.0 ㎝
2010 年
pohoto by　柳場　大



crystallize run #2
キャンバス、油彩
41.0 × 41.0 ㎝
2009 年
pohoto by　柳場　大

鈴木健二

1974 年　愛知県生まれ
1998 年　東京造形大学造形学部美術学科美術専攻 I 類卒業
1999 年　東京造形大学研究生修了

個展
1999 年　key gallery ／東京
2004 年　switch point ／東京
2005 年　WHAT IS THAT? WHAT CAN IT BECOME?　COLUMBIA.（名古屋造形芸術大学内）／愛知
　　TIME & STYLE HOME ／東京
2006 年　TIME & STYLE EXISTENCE ／東京
2007 年　Circle Pieces Color Circuit　switch point ／東京
2009 年　不透過な格子と形づくるかたち　switch point ／東京

グループ展
2003 年　さがみはらあーと '03 オープンスタジオ展　相模原市民ギャラリー／神奈川
2005 年　WORKS IN STUDIO　ONS ／神奈川
2007 年　からっぽでみたす　air's box（名古屋造形芸術大学内）／愛知
2009 年　つばめブックスリリース展　switch point ／東京
2010 年　つばめブックス展　ギャラリー mu-an ／新潟

俵　萌子

TAWARA Moeko

なぜ描くか　ということなど

自分の作品を言葉で語ることは難しい。自ら作ったものを客観的に捉えるという意味で必要なことだと思いますが、あまり客観的になりすぎても、自分のやっていることと距離があるような気がしてしまいます。だからなるべくありのままを書こう、ということが今回このレポートを書くにあたって一つ決めたことです。

良い作品というのは人々に多くを語らせるものであると思うし、私は自分以外のたくさんの人に自分の作品を語ってもらいたいと思います。語られた言葉は自分と世界のあいだの隙間を埋め、曖昧だった自分の輪郭を浮かび上がらせてくれるように思えるのです。絵はあくまで自分の内に在るものを表出させるために描いていますが、発表するということは内と外を繋げたいという欲求の現れでもありますし、できれば美術という枠にとらわれない人たちにも見て語ってもらいたいと思っています。

作品の完成に際しては、具象性と抽象性の両方を感じさせるものでありたいということは意識しています。鑑賞者がそれぞれに多様な解釈ができるようないくつかの側面を持たせたいと思っています。私の絵はよく風景に例えられますが、実際は具体的なイメージを持って描いてはいません。風景的に見えるように描いているのは事実ですが、それは見ている人と自分との間の最大公約数的な役割を担っているのではと最近は意識するようになりました。

描き始めは衝動的に筆を重ね、徐々に絵そのものが力を持って存在し始めるのを待ちます。絵画を成立させるまでには絵の具とか空間とか、今とか過去とか、憧憬とか反発とか様々なことに考えを捕われ、バランスを崩しそうになることもあります。でもそういった自分の抱えるすべてに整然と説明をつけられる作品がたとえ作れたとしても魅力的でないし、自分が今それを求めているとも思いません。たぶん答えが見つかることなどないだろうと思いながら、そこへ至ろうとする行為を巡ってやってくる発見や喜びが自分に描くことを続けさせているのではないかと思います。

大学時代、〝絵を描いていこう〟と決めた時、自分自身で決めたことなのに許しをもらったような気がしたのを憶えています。

自分の身の置き所をずっと見つけられずにいた私は「自分にもやっていいことがあったんだ」という驚きのような、何かの権利を得たような、奮い立つような喜びを感じました。制作を続ける中で挫折や倦怠期もありますが、絵を描いていられる喜びというのは今も変わっていません。

untitled 09-15
キャンバス、油彩
162.0 × 194.0 cm
2009 年
photo by 飯田朋宏

untitled 10-01
キャンバス、油彩
162.0 × 130.3 ㎝
2010 年
photo by 飯田朋宏

俵　萌子

1978 年　静岡県生まれ
2001 年　大阪教育大学教養学科芸術専攻美術コース卒業

個展
2005 年　Gallery H.O.T ／大阪
2006 年　O ギャラリー eyes ／大阪
2008 年　O ギャラリー eyes ／大阪
　　O ギャラリー／東京
2009 年　O ギャラリー eyes ／大阪
2010 年　O ギャラリー eyes ／大阪

グループ展
2005 年　シェル美術賞展 2005　　代官山ヒルサイドフォーラム／東京
2006 年　elan　　O ギャラリー eyes ／大阪
2007 年　Drawing-Exposed essence 07　　O ギャラリー eyes ／大阪
2008 年　VOCA 展 2008　　上野の森美術館／東京
2009 年　Absolute basis －俵萌子と細田聡子の場合－　　O ギャラリー eyes ／大阪

寺島みどり

TERASHIMA Midori

見えていた風景のこと

私たちが目にしたものすべては、音や香り、温度や感触など、様々な要素を含みながら、身体の中で次々と混じり合い、重なり合っていく。強調され、省略され、あるいは形そのものを変化させながら、記憶の中に積み重ねられていく。そのように蓄積された〝風景〟は、一つの地点や方向からだけでは捉えることの難しい〝今自分がいる世界〟の姿をより忠実に表すのではないか。

私はこれを「見えていた風景」と呼び、現在の制作のテーマとしている。すべての空間をこのテーマに沿って把握するための手法を考え、制作を進めている。

以前の作品では、地平線や水平線を想起させるラインを画面下部に引き、鑑賞者が見ている位置から広がって行く空間を表現していた。それらは現実にはない、自分の心の中だけにある理想を絵にしたものであり、制作の源を自分の内側にのみ探索した結果として生まれた絵画であった。自分の表現したいことは、自分の内側に見出されるものであると考えていた。しかし、自分の内側を見つめる作業を積み重ねていくと、やがてその限界に気が付く。

制作をより深めたいと思い、歴史文化や様々な美術作品に触れていく中で、自分を取り巻く世界の豊穣と、それらを表現してきた絵画の可能性を学んだ。同時に自分の存在がそれらと無関係ではなく、密接に連動して成り立っていることを知ったのである。私は初めて世界とのつながりを実感した。そして、制作の中心も〝自分の内側〟から〝今自分がいる世界〟を表現することへと変化していったのである。

具体的には、まず風景やモノの写生を始めた。新しい言葉を知ることによって世界に対する知識が増えるのと同じように、線や形、色といった絵画の構成要素の語彙を増やし、より豊かな空間表現を獲得したいという考えからである。また、油彩だけでなく、様々な画材で実験的かつ抽象的なアイデアスケッチを重ねている。これは自分の中にある記憶の写生とも言える作業であり、また「見えていた風景」を画面に定着させるために必要な表現技術の鍛錬でもあ

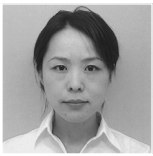
る。

こうした、見ることと描くことがより密接に結びつく写生的なアプローチを通じて、変化し続ける世界の姿を捉え、今自分が存在している世界を「見えていた風景」として描き、表現していくことを積み重ねている。

それらの繰り返しにより、ついには私個人の見ている世界が普遍的な空間表現へと純粋化されていくこと。そんなことが私の絵画に起きてくれればと思う。

見えていた風景
キャンバス、油彩
各 227.3 × 181.8 ㎝（3 点 1 組、展示風景）
2009 年
photo by　表　恒匡

6月10日（水）
キャンバス、油彩
130.3 × 194.0 cm
2009年
photo by　池田理寛



寺島みどり

1972年　京都府生まれ
1996年　京都市立芸術大学美術学部美術学科油画専攻卒業
1998年　京都市立芸術大学大学院美術研究科絵画専攻修了

個展
1997年　ギャラリー白／大阪
2002年　Gallery Den／大阪（'03、'06）
2004年　O ギャラリー eyes ／大阪（'05 ～ '07）
　　旅人の胸　　neutron gallery ／京都
2007年　私たちがみつけたもの　　Gallery Den 58 ／大阪
2008年　ギャラリー風／大阪
2009年　見えていた風景 - 森 -　　Gallery Den ／大阪
　　見えていた風景 - 空 -　　neutron tokyo ／東京
　　見えていた風景 - コトバ -　　neutron kyoto ／京都
　　見えていた風景　　奈義町現代美術館／岡山
2010年　見えていた風景 - 記憶の森 -〈公募　京都芸術センター 2010〉　　京都芸術センター／京都
　　見えていた風景（仮）　　neutron kyoto ／京都（烏丸御池）にて 11月9日～21日迄開催予定

グループ展
2005年　Art Court Frontier 2005　　Art Court Gallery ／大阪
2007年　VOCA 展 2007　　上野の森美術館／東京
2008年　BLUEDOT ASIA 2008　　ソウルアーツセンター／ソウル〔韓国〕

西川　茂

NISHIKAWA Shigeru

inviolable

『私たちには、時間という壁が消えて奇跡が現れる神聖な場所が必要だ。今朝の新聞に何が載っていたか、友達はだれなのか、だれに借りがあり、だれに貸しがあるのか、そんなことを一切忘れるような空間、ないしは一日のうちのひとときがなくてはならない。本来の自分、自分の将来の姿を純粋に経験し、引き出すことのできる場所だ。これは創造的な孵化場だ。はじめは何も起こりそうにないが、もし自分の聖なる場所をもっていてそれを使うなら、いつか何かが起こるだろう。人は聖地を創り出すことによって、動植物を神話化することによって、その土地を自分のものにする。つまり、自分の住んでいる土地を霊的な意味の深い場所に変えるのだ』

ジョセフ・キャンベル（神話学者）

二〇〇八年一月一日。

兼ねてより憧れていたジョージア・オキーフの暮らしたニューメキシコ州を訪れた。地平に消える一直線の道。赤茶けた大地が盛り上がったような山。そして迫る白い丘は、次第に奥へと拡がりを見せる。朝日を浴びて現れた世界は、まさにオキーフのそれであった。

アメリカ、ニューメキシコ州ホワイトサンズ国定公園。ホワイトサンズ自体は正確にいうと砂ではないのだが、真っ白な砂丘が延々と続くトレイルを奥へと進むと、見渡す限りの白い世界。雲一つなく、真っ青な空と真っ白な地平。人影もなく、風が止み、音が消えて、国がなくなった。

圧倒的に無機質な風景はただそれ自体の為にそこにあり、そこに居る者の精神を高揚させる。それは一人の人間として、生き物として、地球に暮らすという実感。

この日、私は「黄、オレンジ、赤、紫、緑、青」の空を見た。

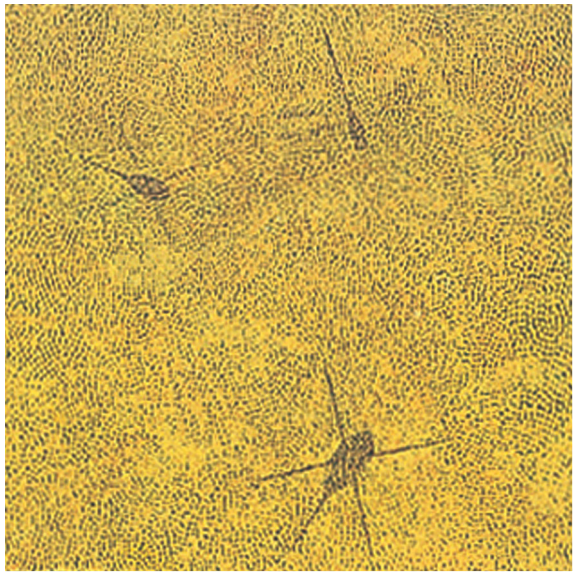
それらの全ての色が優しく次の色へとバトンをつなげ、その本当に壮大な空の下に小さな人。この時、人の小ささに気付くことは、とても幸せな事のように思ったのだった。私自身は神を偶像化して思い描く事は出来ないのだが、この人の小ささと世界の大きさとの関係は神という風景のように思える。

自分の存在が小さくなっていく事は寂しかったり、悲しかったり、マイナスな感じだと思ってきたのだが、こうして様々な風景に出会い、僕はどんどんと小さくなっていくけれど、僕はどんどんと幸せになっていくように思った。孤独ではなく、孤独になるのでもなく、時を受け入れる事は本当に幸せな事だったのだ。

僕にとっての風景とは、景色を切り取るのではなく、こうした体験としての空間を切り取る事です。永遠でも瞬間でもなく、二時間や三日間、或いは数年間といった体験。それは映像として記憶に残るものではなく、身体に残された感覚のようなものだと思います。そして、そこから描かれるもう一つの風景は、私にとっていつか何かが起こる場所であると考えているのです。

dividing line 1
木工パネル、麻布、油彩、蜜蝋
118.0 × 180.0 cm
2009 年
photo by ヨシダ ミナコ

interlude 6
木工パネル、麻布、油彩、蜜蝋
68.5 × 68.5 ㎝
2009 年
photo by ヨシダ ミナコ



西川　茂

1977 年　岐阜県生まれ
1997 年　近畿大学理工学部土木工学学科環境デザインコース中退
2001 年　大阪芸術大学附属大阪美術専門学校美術工芸学科絵画専攻卒業
2002 年　大阪芸術大学附属大阪美術専門学校芸術研究科美術専攻絵画コース卒業
2007 〜 2008 年　Triform Camphill Community（U.S.A）滞在

個展
2003 年　それは、ただそこにある　海岸通ギャラリー・CASO ／大阪
　　尾鷲市三木里町公民館／三重
2004 年　風加街目　Gallery DEN ／大阪
2005 年　ギャラリー白／大阪
2006 年　HAC Gallery ／兵庫
　　Noise/Silence　Gallery DEN ／大阪
2009 年　Sound & Space Limited　ギャラリー白／大阪
　　interlude　neutron tokyo ／東京
2010 年　inviolable　neutron kyoto ／京都
　　2kw Gallery ／大阪（中央区本町）にて 10 月 25 日〜 11 月 6 日迄開催予定

グループ展
2000 年　PEP ART　Gallery DEN ／大阪
2001 年　二人展　Gallery DEN ／大阪
2002 年　ノーマーク展 part2　ギャラリー千／大阪
2004 年　シェル美術賞展 2004　代官山ヒルサイドフォーラム／東京
2005 年　第 1 回倉敷現代アートビエンナーレ西日本　倉敷市立美術館／岡山
2006 年　十五少年漂流記　大阪府立現代美術センター／大阪
　　絵画を見る 2006/2　4 つの窓　ギャラリー白／大阪
2008 年　7Artists　Gallery345 ／ニューヨーク〔U.S.A.〕
2009 年　東京コンテンポラリーアートフェア2009（TCAF 2009）　東京美術倶楽部／東京

廣沢美波

HIROSAWA Minami

夢日記　9月25日

駅のホームで電車を待っていると―
ふと、階段を降りなくちゃいけないと思い降りる。
するとアナウンスが流れる。
「駅の構内にライオンが侵入しました。危険ですので逃げて下さ～い！」
もうライオンは目の前に来ている。
ライオンを刺激しないようにゆっくりと歩く。でも無駄みたいなのでダッシュする。
逃げている最中に白いヒョウが乗客の隙間から見えた。

場面は変わって―
ひどい雨が部屋の中で降っていて目の前に大きな海があるのが見える。
私はじっとしていて、部屋にはお母さんもいる。
雷か獣の声がして、家みたいに大きい白いアザラシがゆっくりとこちらを向きながら倒れてくる。
大きすぎてすごく怖いけど、顔がかわいい。
笑っている。
しぶきがすごい。
あれはきっとさっきいた白いヒョウだと思う。
いつのまにかアザラシはすごく人に慣れた様子でパンを食べている。

朝 ころちゃん
キャンバス、油彩
116.7 × 91.0 ㎝
2009 年

すき
キャンバス、油彩、アクリル
116.7 × 116.7 ㎝
2010 年

廣沢美波

1984 年　山口県生まれ
2007 年　武蔵野美術大学造形学部油絵学科卒業
2009 年　武蔵野美術大学大学院造形研究科美術専攻油絵コース修了

個展
2010 年　おもひでころころ展　　AI KOWADA GALLERY ／東京

グループ展
2007 年　シェル美術賞展 2007　　代官山ヒルサイドフォーラム／東京、京都市美術館別館／京都

福井直子

FUKUI Naoko

キラキラした記憶と作品

私の作品は、自分自身の生き方のような気がします。自分が良いと思うこと・ものを何にも縛られずに自由に制作しようと、常に心がけています。そして、作り上げた作品はいつもキラキラと輝き、心がワクワクする様なものでありたいと願っています。

制作の糧となっているものは、自分自身が経験した記憶です。岐阜の自然の中で育った小さい頃からの記憶、裁縫が得意な祖母や母との記憶、今まで行った旅先でのワクワクした記憶、そしてたとえどこか旅に出なくとも、身の回りで起きるキラキラと感動することなど自分が体験し心が動いたことや、心に未だに残されている記憶をキャンバスだけではなく、布やビーズ、木や陶器、今までに手にしたあらゆる素材に綴っています。

幼い頃に遊んでやっていたことと、今やっていることは何も変わっていず、その時からの延長線なのかもしれません。小学校の頃ダンボールで家、新聞紙でテントを作ったりして遊んでいたり、自分の手提げカバンや簡単なゴムスカートなどを作って自分で使っていたり、服に刺繍をしたり、編み物を祖母と一緒にしたり、もちろん絵を描くのも好きで、保育園に行く前にテレビを見ながらハイジを一生懸命描いていたり…と、これらをやり続けた先が、今の作品のような気がします。何かしら今作り続けて新しく出来上がる作品は、こういった昔の自分の経験の記憶からきています。

あのときの何も考えずやりたいことをやっていた自分が、知らないうちに未だに出てきてしまっています。自分ではあまり意識はしていないのですが、自分が本当にしたいこと、好きなことはそこなのだと思います。だから作品は私自身そのものが凝縮されている気がします。

こうした記憶は今のこの一瞬も常に刻み続け蓄積されています。私はその絶えず書き込まれる自分の記憶の中から作品を作り続け、今を生きている自分という存在、未来への憧れや夢、そして今の社会との繋がりを自分自身に問い質し、固定概念に縛られることなく自由に生きること、本当に美しいものとは何かを探し続けています。これから行く先はたとえ何が待ち構えようとも誰も予想ができないワクワクとした世界が

待っていると信じ、絶えずキラキラと輝いていきたいです。

日が沈む　その先
キャンバス、油彩、ビーズ刺繍
60.6 × 80.3 ㎝
2009 年

海賊（インスタレーション）
平面作品：キャンバス、油彩、ビーズ刺繍
壁面：布、アクリル、ビーズ、その他
2008 年
photo by 坂本阡弘

福井直子

1977 年　岐阜県生まれ
2002 年　東京藝術大学美術学部絵画科油画卒業
2007 年　東京藝術大学大学院美術研究科博士後期課程絵画専攻油画研究領域修了

個展
2005 年　絵のある部屋／ SPICA art ／東京
2006 年　絵のある部屋／ SPICA art ／東京
2007 年　絵のある部屋／ INAX ギャラリー 2 ／東京
2008 年　海賊　　galeria de muerte ／東京

グループ展
2004 年　環展「情と感と知と夢と　Part2」　　アートギャラリー環／東京
2005 年　Think Ahead　中径展　　府中市美術館市民ギャラリー／東京('06)
2007 年　「Game Girl」2 人展　　FARM the salon for art,Tokyo ／東京
2008 年　「0 × 100=」展　　galeria de muerte ／東京
　　全員展　　MAGIC ROOM?／東京
2009 年　第 12 回岡本太郎現代芸術賞展　　川崎市岡本太郎美術館／神奈川
　　Young Artists Japan 2009 ／東京
　　Girls Vol.2　　g aleria de muerte ／東京

藤井俊治

FUJII Toshiharu

油の匂いや甘い臭いと

私は絵をみることを経験することと呼びます。絵をみること、つまり絵を経験することを絵の構造・絵の具の物質感・描かれるモチーフの関係から模索しながら制作をしています。それらの諸要素をいかに絵を経験する新たな切り口として提示できるのかということを最も意識しています。

キューブリックの『博士の異常な愛情』には、撮影・編集されていながら公開前の試写で評判がよくなかったので公開版から削られている幻のパイ投げシーンがある。映画の最後にふとしたことがきっかけで皆がパイ投げを始めるというこのシーンはキューブリックによって実際に撮影されたにもかかわらず我々はみることができない。経験できないという経験。

絵を構造として捉えていくことは、つまり絵をパネル、キャンバス・コットンなどの支持体、地塗り、筆あと・絵の具の量・色という画面中の絵の具のあり方、その絵が置かれている場所を一旦分解して捉えることを指します。なぜわざわざそう捉えるかというと、分解され得た情報を同時に経験しているのが絵を経験することだと考え、それらを単体でみつめ、また一つに戻す行為の中でこれまでみえなかったものがみえるようになるのではないかと考えているからです。またその行為は自分が絵を通して経験していることが一体何であるのかを反芻し、みつめるためにも私にとって大変重要です。

残されているシナリオの文章から幻のシーンを頭の中で映像化する。幸い数枚そのシーンの画像が残されているのでそれをヒントにカメラアングル、登場人物のパイまみれで憤怒した表情を想像してみる。米国国防総省地下の最高作戦室の外では皆殺し爆弾によって死の灰に包まれつつある。僕はただの映像作品という認識を超えてその世界にしずみ入る。幻の中の現実は白く、現実の中の幻は黒い。

モチーフとして選んでいるのはファッション雑誌のモデルから、ダイヤモンド、様々な花、パイ投げされた美人など様々で

す。それらを一つの画面に構成して描くのですが、構成上注意しているのは、固いものとやわらかいもの、軽いものと物質感のあるもの、美しいものと醜いものというように二元的な意味を同じ画面に描くようにすることです。それは一つの、例えば写真のようにある部分をトリミングするという単視点ではなく、複数のモチーフや部分が見え隠れする複視点にすることで意味を一つに固定せず、絵の構造のように同時に経験することで経験される何かにするためです。

世界が死の灰に包まれる中、行われるパイ投げ。悲惨な未来と滑稽な現在が入り交じる幻は甘くねちょねちょしたものによって僕の顔を覆い尽くし、みえなくなる。

秘密の嘘
綿布、油彩
60.6 × 72.7 ㎝
2009 年

真夜中のパレード
綿布、油彩
53.0 × 91.0 ㎝
2009 年

藤井俊治

1983 年　滋賀県生まれ
2009 年　京都市立芸術大学大学院美術研究科絵画専攻細目油画修了

個展
2008 年　O ギャラリー eyes ／大阪
　　O ギャラリー UP.S ／東京
2009 年　ギャラリーほそかわ／大阪

グループ展
2004 年　シェル美術賞展 2004　　代官山ヒルサイドフォーラム／東京
2005 年　群馬青年ビエンナーレ '05　　群馬県立近代美術館／群馬
　　ART UNIV.2005 芸術系大学作品展 2005　　キャンパスプラザ京都／京都
2006 年　外礒秀紹×藤井俊治　　ギャラリー揺／京都
2007 年　exotic`07 『夢のなかで見た色』長尾浩幸（制作協力）　　愛知県児童総合センター／愛知
　　「10 人のまなざし」展　　ギャラリー揺／京都
　　個のしごと展 IX　　信濃橋画廊／大阪
　　トゥールビヨン 5　　O ギャラリー eyes ／大阪
　　SHANGRI-LA CHANDELIER　　The Artcomplex Center ／東京
　　LOCA 展　　京都市立芸術大学／京都('08)
2008 年　シェル美術賞 2007 京都展＜ 2003、2004 年入賞者コーナー＞　　京都市美術館／京都
　　キュレーターズ・アイ 2008　　ギャラリーマロニエ／京都
　　ART OSAKA2008　　堂島ホテル／大阪（'09）
　　四条ストリートギャラリー　　京都市四条通／京都
2009 年　学内展　　京都市立芸術大学／京都
　　incubation08　now here,nowhere　　京都芸術センター／京都
　　エモーション・リリース　　成安造形大学ギャラリーアートサイト、湖南市立甲西図書館／滋賀
　　New Location/Generation　　ギャラリーほそかわ／大阪
2010 年　第 29 回損保ジャパン美術財団選抜奨励展　　損保ジャパン東郷青児美術館／東京

保坂　毅

HOSAKA Takeshi

素材について

油絵具を選択したのは、あこがれからだったような気がしますが、色や質感、匂い、乾きの遅さ、そして耐久性に惹かれ、今でも油絵具での制作を続けています。

現在の作品の多くはレリーフ状に立体的ですが、絵として制作しています。

油絵を構成する要素を大雑把に挙げると、絵具の線や面、色彩、支持体とそのサイズ、モチーフやテーマ、構図やプロセス、制作および展示する環境（空間や光）などがあると思います。

キャンバスを木枠に張られた布として捉えた場合、現代の絵画は額に入れられることが少ないので、美術館やギャラリーに行けばその側面を見ることができます。キャンバスの側面には下地の色など、制作過程の痕跡や情報が残っている(もしくは残っていない)ことに面白みを感じ、その側面が正面から見える支持体を作った場合に、絵に対してどんなアプローチができるかという興味から支持体の変形を始めました。

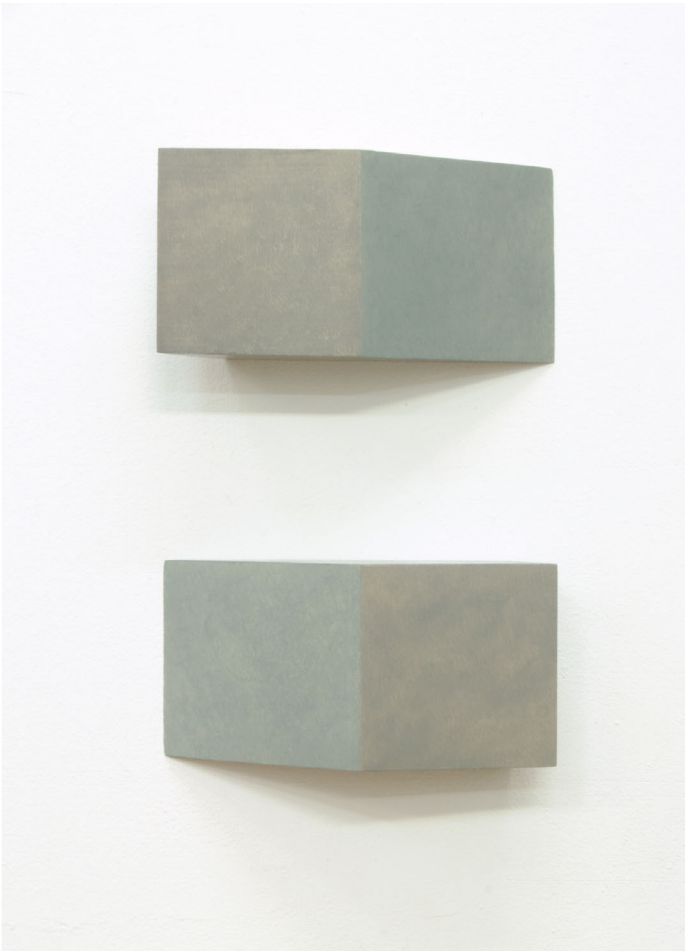
しかし、実際に支持体を変形させてみると、キャンバスの側面で感じたその面白さよりも立体的な要素が強烈で、支持体は絵の一部だということを強く意識させられる結果となりました。さらに、支持体が壁に落とす影や、異なる面のトーンの違いなど、それらを生じさせる環境の重要性も再認識しました。

静物画を描く際に、モチーフの色や形などの要素を基に絵具の色を決めたり、画面を構成する（逆に絵のためにモチーフを配置する）のと同じように、支持体や環境が絵を描く動機を提供する素材にもなっています。

支持体の素材には比較的加工が容易なＭＤＦボードを使用していますが、キャンバスとは異なり絵画用の製品ではないので、その加工方法や処理には気を使います。木材とＭＤＦボードでパネルを作成し、そこに膠を引いた後、油性の下地を塗っています。

今回初めてその下地にクイックベースホワイトを試し、その適度な粒子の粗さと粘度、上にのせた絵具の発色はとても気に入りました。今後絵を描き続ける上で重要な

素材のひとつになりそうです。アクリラのジェッソシリーズと同様に、油性の下地でも異なる粒子サイズが選択できたらぜひ試してみたいです。



上：Form 10-1
下：Form 11-1
木材、MDF ボード、膠、油絵具
上：9.0 × 19.0 × 5.0 ㎝
下：9.0 × 19.0 × 5.5 ㎝
2008 ～ 2009 年

Block 03-1, ～ 8（順不同、展示場所により異なる）
木材、MDF ボード、膠、油絵具
各 12.0 × 9.0 × 5.0 ㎝
2008 年

保坂　毅

1980 年　福島県生まれ
2003 年　武蔵野美術大学造形学部油絵学科卒業
2005 年　武蔵野美術大学大学院造形研究科油絵コース修了

個展
2006 年　ART TRACE Gallery ／東京
2007 年　ART TRACE Gallery ／東京
2009 年　A-things ／東京
　　youkobo ART SPACE ／東京

グループ展他
2009 年　サイボーグの夢展　　ART TRACE Gallery ／東京
　　TRIO -A- STRIPE　　A-things ／東京
2010 年　TRIO -A- GRID　　A-things ／東京（吉祥寺）にて 7 月 7 日～ 8 月 29 日迄開催予定

三橋　灯

MITSUHASHI Akari

制作について

私の作品は、考えること、考えないこと、知ること、描くことが、ふわふわした状態で何かをきっかけに一つの画像として浮かび上がり、絵画となって表れる。考えるとうまくいかない事があり、考えないと矛盾が残る。何かを知ると筆が動かなくなる時もあるけど、知らなきゃまずいこともある。描かないとイライラしてくるし、描き出すと次の作品を考える。

だから、制作は果てしない行為だと思うのである。

木枠を組み立てて画布を張り、白い画面を前にすると気持ちがすんなりと描くことに集中し、様々な画像が少しずつ自分の中から込み上げてくる。うすく水で溶いた絵の具を真っ白い画面に滲ませてゆく瞬間が好きで、じわりじわりと絵の具を吸い込んでゆく画布と向き合うと、不安と期待が混じったなんともいえない感情が沸いてくる。

次の日に画面を観ると、なんだか未消化のまま吐き出したものが描いてある。昨日の自分の矛盾点と向き合いながら加筆し、「次はここでこうしなきゃ」と反省しながらも、どうにか今の作品を面白くしようと姑息に考えて出してしまう。

そうやって、自分の中にある理想と現実が否応なく画面に反映していき、今の自分から生まれた絵が創り出されるのである。

だから、たまに辛くもある。

画面をきれいにまとめようと必死になる自分に気づくと、虚しい気持ちになる。でもそんな自分に屈するのが絶対に嫌だから、自分と戦うために画面に食らいつく。その行為を継続するうちに作品は変化してゆく。意識的に変わろうともしているが、無意識に変わってゆくところもある。

描く前には、どんな形にせよ今の自分に素直になろうと必ず思うようにしている。作品を描く行為は私という人間を振り返る作業だから、私の制作はまだまだ続いてゆくのだと思う。

今は完成した作品に納得できないことが多いけれど、筆をとり、色々な事を頭に巡らせながら黙々と制作をする自分と向き合いたい。

夢のもやくや
綿布、アクリル
116.7 × 116.7 ㎝
2009 年

水郷
綿布、アクリル
197.0 × 333.3 ㎝
2009 年

三橋　灯

1984 年　東京都生まれ
2008 年　多摩美術大学美術学部絵画学科油画専攻卒業
2010 年　多摩美術大学大学院博士課程前期課程美術研究科絵画専攻油画領域修了

個展
2008 年　Shonandai MY Gallery ／東京
2010 年　Shonandai MY Gallery ／東京（六本木）にて 11 月 1 日〜 8 日迄開催予定

グループ展他
2007 年　DISCOVERY 2007　　KEY gallery ／東京
絵画展　　文房堂ギャラリー／東京
パルテノン多摩美術公募展　　パルテノン多摩／東京
2008 年　CAAF2008/24+6　　クレアーレ青山アートフォーラム／東京
2009 年　MY Harmonious Exhibit 2009　　Shonandai MY Gallery ／東京
第一回青木繁記念大賞西日本美術展　　石橋美術館／福岡
International cultural exchange exhibition　　SAVOY HOTEL ／モスクワ〔ロシア〕
2010 年　New Year Expo（International cultural exchange exhibition 巡回展）　Riviera Hotel ／カザン〔ロシア〕

山下美幸

YAMASHITA Miyuki

2009年、ブービー賞

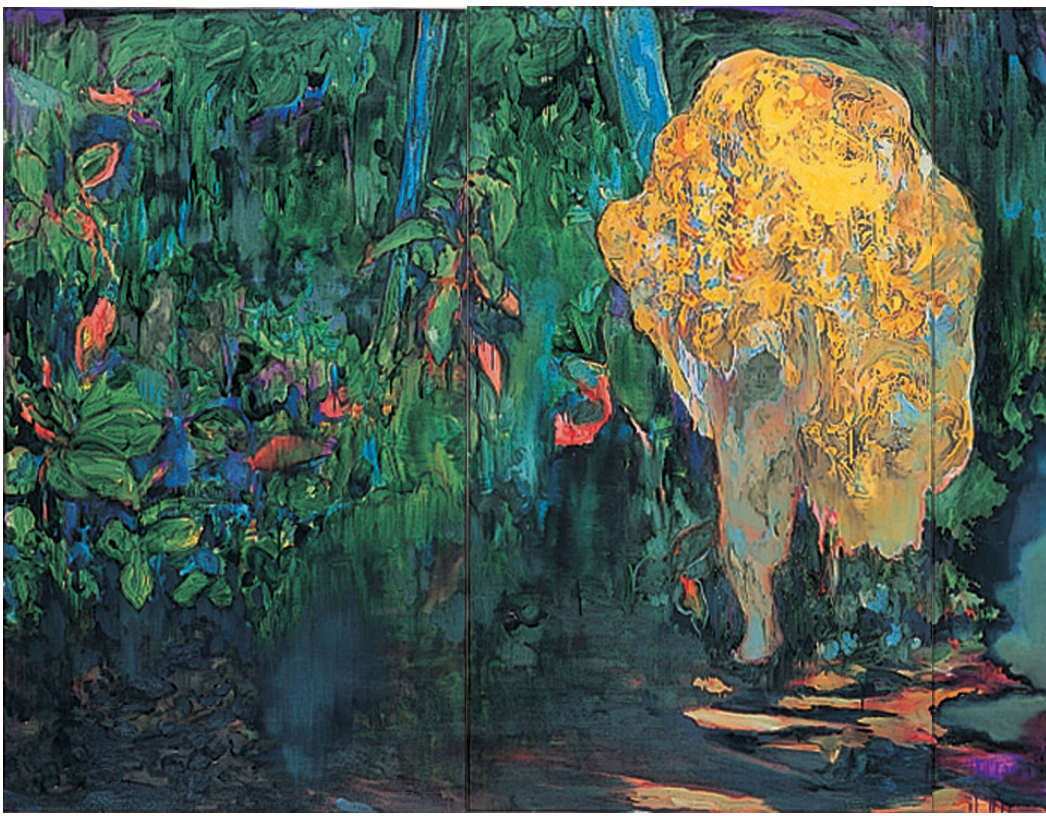
作品について何を書いてよいのか、ほとほと考えあぐねて、幼稚園のころ部落のボーリング大会でブービー賞を獲得し、米俵をもらった話でもしようかと思ったが、なかなか作品に結びつかないので止めることにした。そこでふと思い出したのが、わたしが通っていた中学校にたびたび現れた「怪獣じじい」というおじいさんのことだ。「怪獣のようなじじい」なのか「歳をとった怪獣」なのか、どちらの名詞がどちらの名詞を修飾しているのか。彼のことを知らない人には知る由もないことである。彼は、トリックスターのごとく中学校に現れ、わたしたちのつまらない中学の授業に、一時の休息を与えてくれた。基本、ポカポカ陽気の日に現れ、普段はニコニコとしている彼であった。しかし彼には一つだけ弱点があった。それは「赤いもの」に過剰に敏感であるということである。赤いランドセルなどをみると、少々正気を失ってしまうのだ。赤いものをみては「怪獣の卵が割れてるぞ！」と叫ぶので、怪獣じじいと言われるようになったことがその所以である。なまじヒーローのような一面もある彼だが、我々とは全く違うルールで動いている彼に、わたしは幾ばくかの恐怖を感じていた。

ついでに「怪獣ばばあ」についても話しておこうと思う。「怪獣ばばあ」とは前述と違い「歳を取った怪獣」という意味で、わたしのおばあちゃんのことである。「怪獣」、そのうえ「ばばあ」なんて孫に言われたら、それなりにおばあちゃんも悲しむだ

ろうけど、言い過ぎではないくらいヤンチャなおばあちゃんだと思う。頑固このうえなく、多趣味で、器用で、プライドが高い。さすが昔の人というだけあって、モノは大切にし、継ぎはぎにした靴下はほぼ原型をとどめないほどパッチワークされていた。そんな怪獣も歳を取り、90歳間近にして暴れ回ることが少なくなった。尚且つ忘れっぽくなった。さまざまなことを忘れ、昨年夏に静岡で起こった地震さえも、翌日になれば「そんなことあったかい？」なんてノホホンとしている。震度5の揺れを彼女は確かに感じたはずなのにだ。そして昔とはうって変わって激しく優しくなっている。くしくも山下家はいままでの家族史のなかで、もっとも仲良しなインターバルに入ったのだ。

そんな「じじい」も「ばばあ」も「わたし」も、同じ世界に生きている。そして、同じ風景を見ているのに、違う意味を見いだしてしまうから、我々はたびたび苛立ってしまうのだろう。この苛立ちは、わたしの作品にとって重要なもので、無くてもいいけど明らかに重要なものなのである。

波枕
キャンバス、油彩
194.0 × 336.0 ㎝
2009 年
photo by　丸橋伴晃



最初のサル
キャンバス、油彩
90.9 × 72.7 ㎝
2009 年

山下美幸

1979 年　静岡県生まれ
2002 年　女子美術大学デザイン科卒業

個展
2005 年　見上げれば、水の底　　cafe ユイット /gallery ユイット／東京
2007 年　Lilliput for Me　　BOICE PLANNING ／神奈川
2008 年　ノンシャランな時々　　Takuro Someya Contemporary Art/TSCA ／千葉
2009 年　Project N38　　東京オペラシティアートギャラリー　コリドール／東京

グループ展
2002 年　gomphrena1 周年記念展　　shop & gallery gomphrena ／東京
2005 年　あたらしい果実 - ワークショップ関連展示 -　　東京都現代美術館ハイビジョンルーム／東京
2006 年　百花繚乱　　BOICE PLANNING ／神奈川
2007 年　机上位　　BOICE PLANNING ／神奈川

和出伸一

WADE Shin'ichi

接続に失敗しました

年を追うごとに、分からないことが増えていくので困る。

絵を描き始めた頃は、絵とは一体何なのか、どんな絵を描きたいのか、自分なりに明快な答えを持っていたはずなのに、今となっては、もうどうやって絵を描き始めたら良いのかすら分からない。いや、絵画だとか芸術だとか言うまえに、世の中のことも、生活のことも、他人のことも、私のことも、まったく分からなくなってしまった。分かったのは、それらの近寄り難いほどの、途方も無い重さと複雑さだけだ。

全く訳の解らない世界に一人で放り込まれ、全く訳の解らない肉体を引き摺り、全く訳の解らない心を持て余し、いつも落ち着き無くウロウロと歩き回り、あるいは布団の中で震え、私はずっと余所者で、揺れては消える足場の上でどうにかバランスを取りながら、それでも、どうしてもやらなくては居られないことが、時々何の脈絡も無く訪れて、その回路だけが、私と世界との間に、一瞬だけ何か風に似たものを吹き渡らせてくれる。その瞬間にだけ、私は世界に接続されていて、余所者ではなく、今ここが居場所なのだと感じることが出来る。そんなことが、私にとってのいわゆる表現なんだけれど、さてどうしよう?

スケッチをする。

歩きながら、眼に飛び込んでくるもの、何か引かれるものを、次々と描いていく。それはちょうど、古いダイヤルアップ回線で、インターネットに接続する時の、「ぴーがーがちょんがちょんがちょん」という謎の音を聞きながら、接続が成功するのをイライラと待っている感じに似ていて、でも殆どの場合は、「接続に失敗しました」というエラーが吐き出されて終わる。成功する時は、描く前からそれが上手くいくことが分かっていて、既に描き終えてしまった未来の記憶をなぞるように身体が動く。じゃあ成功することが分かってるときだけ描けば良いじゃないか、なんて思うのだけれど、ひたすら手を伸ばして届かない、その苛立ちの繰り返しの中に居ないと、どうやらその未来の記憶に、どこか向こう側に一瞬つながった回路に、身体が反応できない

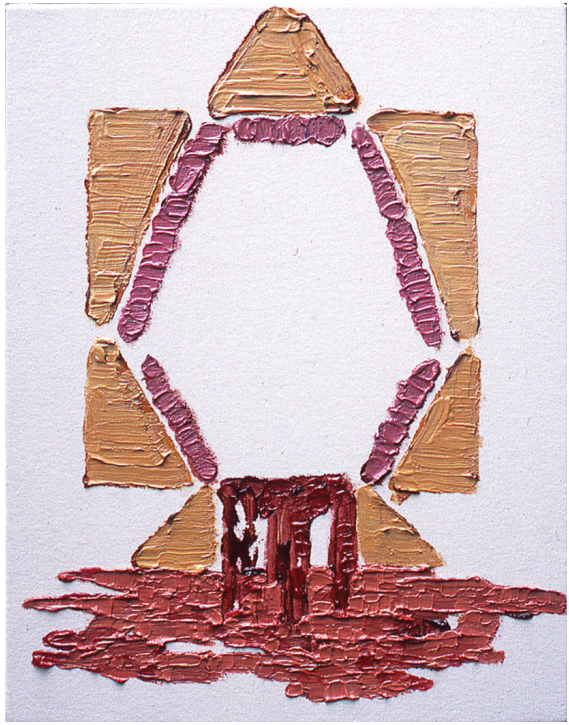
らしい。不経済極まりない。

その回路がいつ、どんな時に開くのか、それがどこに着地するのか、私には見当もつかない。それは、そもそも絵画に着地することが出来るのかすらおぼつかないような、一瞬の、強くて明快だけれども形も色もない、繋がっているという感触だけの何かだ。常に待ち構え、手を伸ばし、失敗を繰り返す中にしかそれは訪れないのに、その失敗の繰り返しとは直接何の関係もない。それは向うからの問いかけで、私は一瞬の内に態度を決定し、その問いかけに答えなければならない。それも、力まず、自然に、恐れず、躊躇せず、ハッキリと、大きな声で。考え込んでいる時間は無い。

たぶん、そのように明快に答えている姿そのものが、『自由』と呼ばれているものなのだろう。そんな、1ミリもごまかしのきかない、見栄もはれない、自分の持っている正味の『自由』さだけが、結局は人に伝わる、伝わってしまう唯一のものなのかもしれない。

「出歯亀」の絵
綿布、アクリル
45.5 × 38.0 ㎝
2010 年

「損なわれた鏡」の絵
綿布、アクリル
41.0 × 31.8 ㎝
2010 年



和出伸一

1976 年　静岡県生まれ
1997 年　京都芸術短期大学造形芸術学科洋画コース卒業

個展
1999 年　立体ギャラリー射手座／京都
2000 年　立体ギャラリー射手座／京都
2002 年　立体ギャラリー射手座／京都
2004 年　京都造形芸術大学ギャラリー RAKU ／京都
2005 年　京都造形芸術大学ギャラリー RAKU ／京都
2006 年　ホワイトキューブ大阪／大阪
2007 年　信濃橋画廊／大阪
2008 年　信濃橋画廊／大阪
2010 年　立体ギャラリー射手座／京都（中京区）にて 11 月 9 日〜 14 日迄開催予定

グループ展他
1997 年　三箇大介・和出伸一展　　立体ギャラリー射手座／京都
2007 年　個の仕事 IX　　信濃橋画廊／大阪
2009 年　トーキョーワンダーシード 2009　　トーキョーワンダーサイト渋谷／東京

http://www.k3.dion.ne.jp/~ sinwade/

The Scholar Perspective 20

アクリラート別冊 2010

発行日　2010年7月1日発行
定　価　1,000円（本体953円）
発行所　ホルベイン工業株式会社
　　東京都豊島区東池袋2-18-4
発行人　吉村信夫
編　集　倉田妙子

holbein